

教学半也



ご意見はコチラから

令和8年3月9日

No. 24

初任者研修に
関わる読者対象

自己課題解決に向け取り組んだ初任者1年目の歩み ～初任者研修メンターチームの先生方と共に～

K中学校のR先生（保健体育科）は、今年度の自己課題を次のように設定しました。

自己課題の解決に向けて、メンターチームの先生方と校内研修を行ってきたR先生の1年間の取組の様子を紹介します。



運動が苦手な子や得意な子、それぞれがいきいきと活動できる授業

12月に行われた「授業力向上研修Ⅱ」では、球技領域：ネット型の授業を公開し、授業研究会で生徒への支援の在り方について、先生方と学び合いました。

12月2日 授業力向上研修Ⅱ（公開授業） 2学年「ダブルセット・バレーボール」

学習問題「セッターのトスを上げやすくするためにはどうしたらよいだろうか。」

AさんとCさんは運動が得意ではない生徒、アタッカーのDさんは運動が得意な生徒でした。Aさんのチームでは、Dさんのアタックを打つ攻撃で得点したいと考えていましたが、アタック前のトスが安定せず、なかなかDさんがアタックを打つことができませんでした。そこで、R先生は次のようにAさんと会話をしました。

Aさん：私のトスが上手くいなくて、Dさんがアタックを打つことができないんです。

R先生：なぜ、トスが上手くいかないのでしょうか？

Aさん：Bさんからのパスが一定にならないので、ボールの落下点に入るのが難しくくて…。

R先生：Bさんと（セッターの）Aさんの距離はどうなっていますか？

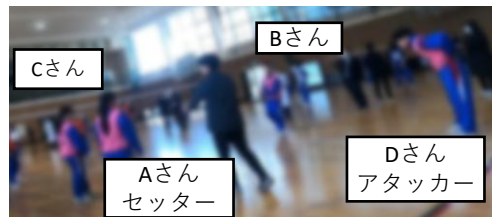
Aさん：少し遠い気がします。そうか。もう少し（Bさんとの）距離が近ければ、トスがやりやすくなるのかもしれない。

R先生：そうですね。BさんとAさんは、どのくらいの距離がよさそうですか？

Aさん：そうですね…。

Aさんのチームのねらう攻撃

4人で一人1回ずつボールに触れ、4人目がアタックを打つ「4段攻撃」をするバレーボール。Cさんは1回目の触球者で、Bさんにパス（レシーブ）をする役目。Bさんは2回目の触球者で、セッターのAさんに向け、ボールをバウンドさせてパスをする。Aさんはトスを上げ、アタッカーのDさんがアタックを打つ。



その結果、「第2触球者のBさんとセッターの距離は、どのくらいであればアタックが打てるトスを上げられるのか」という、本時解決する課題が明確になりました。そして、Aさんのチームは、「Bさんは、コートの中あたりからAさんにパスすると、距離も近くてミスが起きにくくなる」「CさんのBさんへのパスも、コートの中あたりをねらうとよさそう」など、気付いたことを仲間に伝え合いながら、Dさんがアタックを打つ攻撃の作戦を考え、試合で攻撃を実現させることができました。

Aさんは、本時の振り返りの場面で右のように記述し、第2触球者とセッターの距離について自分なりの考えをもつとともに、第2触球者がセッターへ送るパスの強さについても、相手への配慮をすることの必要性に気付いた様子が伺えます。

1～2mくらいがいい距離かな
と思ふ。バウンドさせる強さは軽く
うでの力をぬいたかんじ。

本時の振り返りの場面でのAさんの記述

このように、運動が苦手な生徒も得意な生徒も、互いに話し合って作戦を考えて実行するという、いきいきと活動できる授業を行うことができた背景には、保健体育科の先生だけでなく、他教科の先生と一緒に授業づくりを行ったメンターチームの先生方との学びがありました。

6月 校内研修：先輩先生の授業参観

ねらい：先輩先生の授業から自己課題解決のヒントを得る



R先生

先輩先生は、運動が苦手な生徒も得意な生徒も、いきいきと活動できるようにするために、どのようなことに気を付けているのですか？

全員に「本時に解決を目指す学習問題は何か」を分かりやすく伝えることを大切にしています。生徒にとって学習問題が明確になると、解決策を求めて生徒同士でアドバイスや相談をし合い、「こうすれば解決できそうだ」と積極的に関わり始めます。そのために、前時の振り返りの場面で「次はここを解決させたい」と書いたり話したりできる場をつくり、次時の学習問題が生徒の言葉から設定できるように心がけています。



保健体育科
先輩先生

R先生は、保健体育科の先輩先生の授業を通して、「学習問題が生徒の声から立てられていると、その解決を目指して運動が苦手な生徒も得意な生徒も、互いの関わりが活発になる」ことに気付きました。

11月 校内研修：12月の授業力向上研修Ⅱの授業公開に向けたOJT研修

ねらい：他教科の先生方と授業構想について語り合い、教師の支援の方向を見いだす

体育が専門でない私からは、やろうとしていることが難しすぎるような気がします。生徒の困り感を具体的にしましょう。「何に難しさを感じるか」を先生が予想することで、学習問題もより生徒が解決したいものになるのではないのでしょうか。



他教科の
先輩先生



R先生

「このくらいならできるだろう」と考えていたことも、生徒の立場からは難しい場合があると指摘していただきました。生徒の実態把握が十分でなく、**生徒の立場に立って、気持ちや言葉を考える視点をもつことが重要**だということに、改めて気づきました。

他教科の先輩先生からは、授業構想では、生徒の実態から生徒の困り感を予想し、生徒の立場に立って考えることの大切さを教えていただき、このことが12月の授業公開時のAさんとの会話につながっていくことになりました。

12月の授業公開を終え、1年間の歩みの成果を、R先生は次のように話していました。



R先生

先輩先生から教えていただいた、**生徒の困り感を予想し、生徒の「これを解決したい」という声から学習問題を設定することで、生徒同士の関わり合いが増え、運動の苦手な生徒も、得意な生徒も、互いに会話をする回数が格段に増えました。その結果、皆がいきいきと活動できるとわかりました。**校内の先生方からたくさんのアドバイスをいただき、授業づくりを一緒に行っていたことで、自分の授業に自信がもてるようになってきました。

メンターチームの先生方と研修を深めてきたR先生は、授業の中でも生徒一人一人に積極的に声をかけ、生徒の困り感に寄り添った授業を行っています。今年度、自己課題を設定し、メンターチームの他教科の先生方から、自分の授業のよさや改善点を指摘していただき、よりよい授業の実現を目指して学んできたR先生は、生徒の思いを読み取るための視点を身につけていきました。1年間を通したメンターチームの先生方のサポートが、R先生の課題解決に大きな力となりました。

先生方の授業改善に向けた自己課題は何でしょうか。R先生のように、自己課題を設定し、その解決に向けた取組を通した授業改善に、先生方も取り組んでみませんか？